

# 仕事を頼まれる人になろう！



文学部長  
都筑 学

Manabu TSUZUKI

「仕事は忙しい人に頼め」。これは、人に何かを頼むときの鉄則である。

この忙しい人とは、どんな人なのか。普段から、「忙しい、忙しい」と言っているような人ではない。そういう人は、メンタルで既に負けている。小さなコップと大きなコップを思い浮かべてみよう。2つのコップに、水を注いでいく。最初に水が溢れてこぼれるのは、どちらのコップか。誰もがすぐにわかることだ。それは、小さなコップの方である。器が小さければ、許容量も小さい。状況の変化にも対応できない。その結果、忙しく感じてしまうのだ。そんな人に、何かを頼んだらとんでも無いことになる。気をつけないと。

忙しい人とは、それではどういう人なのか。それは、仕事のできる人である。そういう人は、柔軟性に富んでいる。状況に合わせて、対応できる。ちょっとした時間でも、それを有効に活用して仕事をこなせる。効率よく、物事をやり繰りできる人である。段取りもうまい。傍から見ていても、ちっとも忙しそうには見えないのである。そういう人には、安定感がある。仕事を頼んでも、安心して見ていられる。任せられるのである。そういう人に仕事を頼みたい。それがポイントなのである。

卒業生のみなさんは、これから大学から社会へと巣立って行く。初めての世界。慣れない仕事。初めて会う先輩や上司。緊張する人間関係。そうした中で、仕事に取り組んでいかなければならない。胃が痛くなることや朝起きられないこと。そんなことも、きっと経験することだろう。ストレス解消や気分転換をしながら、仕事に向かっていく。そうしたバランス感覚を大事にしてもらいたいものである。

職場で、誰かから仕事を頼まれる。そういうことがあったら、それは大きなチャンスである。「自分にはできない」「無理」と思う前に、深呼吸して考えてみよう。「なぜ、その人はあなたに仕事を頼んだのか」と。

自分のことは自分がよく知っている。とかく、そんなふうを考えがちだ。だが、実は自分では気づいていないことはたくさんある。あなたに仕事を頼んだ人は、そこを見ている。あなたが気づいていない面を見込んでいるのかもしれないのだ。自己評価よりも他者評価。他人の方が、あなたを正確に見ているのである。

仕事を頼まれたということを大事にしよう。仕事を頼まれたら、誠実にやっつけよう。その積み重ねが、あなたを成長させることになる。仕事を頼まれる人になって、一回りも二回りも大きくなっていく。それがあなたの人生を充実したものにしていけるのである。

# 快樂よりも感動を！



総合政策学部長  
松野 良一

Ryoichi MATSUNO

卒業おめでとうございます。期待と不安を抱きながらの旅立ちだと思います。私は企業で25年ほど働いた経験がありますので、君たちには「ようこそ！実社会へ！」という言葉もかけたいと思います。

1年目の仕事は、どの業種も大変です。慣れるまで、辞めたいと思うことがあるかもしれません。私は最初、新聞記者になりましたが、入社1年目は、30回くらいは「辞めたい」と思いました。毎日毎日怒られました。「使えない奴」「向いていない」「何回言ったらわかるんだ」「もう一回行って来い」という罵声は、何度浴びたかわかりません。しかし、なんとか、仕事を続けられたのは、ある教訓を身に付けていたからだだと思います。

それは、「快樂よりも感動を」ということです。これはもともと、ナチスのアウシュビッツ収容所から生還した精神医学者、V・E・フランクルが言った内容です。「人生の幸福は、どれだけ快樂を得たかではなく、どれだけ感動を得たかで決まる」ということです。人間は怠惰で快樂に走りがちです。しかし、目標を定めて、少しずつ努力して、達成していく。苦難や壁を乗り越えて初めて、本当の感動があるということです。だから、辛いということは、その先に、感動が待っている序曲みたいなものだという指摘です。

皆さんは、大学時代にいろんな活動やプロジェクトをこなして来たと思います。最初は苦勞の連続だったことでしょう。でも、グループワークで力を合わせて課題を達成したことと思います。大舞台上でプレゼンしたり、コンテストで受賞したり、報告書、論文などのアウトプットを出したことでしょう。その時の達成感、何物にも替え難いものだったのではないのでしょうか。努力して、少しずつ目標を達成していく。そして、少しずつ、自信を付けて行く。そのトレーニングの繰り返し、人間を総合的に成長させると思います。

皆さんなら、実社会でも、元気に活躍してくれることと思います。仕事を辞めたいと思った時、向いてないと思った時、自信をなくした時は、どうか学部時代に行ったプロジェクトやゼミ活動、留学やインターンなどを思い出して下さい。きっと、もう一度やってみようという勇氣と希望が生まれてくるはずですよ。

そして、大学、学部はずっと、皆さんの「心のふるさと」であり続けます。いつでも遊びに来てください。また、お会いしましょう！